

「あの虹の向こう側には何があるの？」

幼い頃の妹の声。まだバレエを始めていないころの。それに答えようとする母の声が聞こえてくる。ドアの隙間からそれを聞きつけて、ジャンは部屋にかけこんだ。

お母さん。なんて答えてるの？

ずるいよ、フランソワーズだけじゃなくて僕にも教えてよ。

慌ててあたりを見回して、妹を車に押し込もうとしている黒服の男達が目に入った。

フランソワーズ！

おい、お前達！ 妹をどこへ連れて行く気だ！？

決して広くない部屋の一室に響きわたる、けたたましい目覚し時計の音で、ジャン・アルヌールは飛び起きた。最悪の目覚めだった。

のろのろと体を起こして、制服を着込む。

思い出したくもないあの日を夢で思い出させられて、仕事などしたくはない気分だったが、組織に属している以上は規則には従わなくてはならない。

皮肉なことに窓の外は快晴。それでも気分まで晴れるわけじゃない。

だけど、こんな日に空を飛べば上空はさぞ見晴らしが良いことだろう。それはささやかな救いではあった。

あの、すべてが変わってしまった日からどれだけの日数が過ぎたのだろう。

あれからは気付けば朝がきて、夜となり。ただ時間だけが過ぎ去っていく。

妹・フランソワーズの消息は一向にわからない。

ふざけて母の腕を引っ張る。仕方ないわね、といって母が笑いながら自分のほうを向いてくれる。

なつかしい母親の匂い。だけど。そっと自分を抱きしめて、やさしく話しかけてきた人は。

「ジャン。落ち着いてよく聞いて。あなたのお父さんとお母さんが…」

お母さんじゃない。

伯母さん、いつパリに出てきたの？ それ喪服だろ？

それに一体何の話？ 今、お母さんに聞いていたんだ。虹の向こう側にあるのは何って。

「フランソワーズ。お兄ちゃんも、伯母さんもここにいますよ。だからそんなに泣かないで」

フランソワーズ。何で泣いているの？

ねえ、伯母さん。お母さんは？ お父さんは？

少女の細い泣き声がぱたりと止む。

あれ、フランソワーズ…？ どこに行ったんだ？

「その日」はついにやってきた。

009が完成したという報告を受け、008までのテストサイボーグは指定の場所で待機しているように命ぜられた。

おとなしく命令に従っているように見せかけて実は、反乱の計画はそのときすでに開始されていた。

指定場所は、岩場の多い海岸だった。

「そろそろ009がここへたどり着くはずだ」

「我々のテストに合格していれば、だがな」

「手術は完璧だった。失敗作のはずがない」

博士達がなにやら小競り合いをしているその後ろで、001から8までの8人はそのときが来るのを待ち構えていた。

（何でまたこんなところで）

（009のテストに必要なんだろ）

博士達には聞こえない通信を使っ、いつまでになるかわからない待機時間をつぶす。

（一応、9で最後らしいから、期待も大きいんだろ）
時間のたつのは、こういうときは遅い。